

米国インディアナ州立学校のリソースルームの実態

林 真知子 (名古屋市立守山養護学校)

都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)

要約 米国のリソースルームは、我が国の教育現場にはみられない特別な支援サービスであり、その運営の実態は我が国にあまり報告されてこなかった。我が国では、中央教育審議会の答申(2005)が、特別支援教育の対象をLDやADHD等にも広げることや通常の教育の場での支援が喫緊の課題であることを示してから10余年が経過した。今後、我が国でリソースルームのような学習支援の場が通常の学校に広く整備されれば、特別支援教育がさらに充実する可能性がある。

米国のリソースルームは、ある面では我が国の通級による指導と似ているところがある。通常の学級に在籍している障害のある児童生徒を対象にしている点や通常の学級から児童生徒を抽出する形で一定時間内で特別な指導を行い、指導が終われば通常の学級で学習や生活をさせるという点である。

特別支援教室(仮称)の制度を構想していく際に、米国の現状の一端から考えられることは特別支援教室(仮称)を一部の学校だけに設置するのではなく、すべての学校、特に小学校に設置し、子どもが自分の学校内で支援が受けられる、という点である。

キーワード: リソースルーム, 通級指導教室, 特別支援教室, インクルーシブ教育システム

I. はじめに

21世紀に入ってから特殊学級や通級指導教室の在り方が議論された。当時、中央教育審議会(2005)は、「学級編制や指導の実態を踏まえ必要な見直しを行いつつ、障害の多様化を踏まえ柔軟かつ弾力的な対応が可能となるような制度の在り方について具体的に検討していく必要がある」とし、「制度として全授業時間固定式の学級を維持するのではなく、通常の学級に在籍した上で障害に応じた教科指導や障害に起因する困難の改善・克服のための指導を必要な時間のみ特別の場で行う形態(例えば「特別支援教室(仮称)」)とすることについて具体的な検討が必要である」と提言している。

文部科学省(2010)は、「現在の特別支援学級と通級による指導では制度として連続性がないため、児童生徒のニーズに応じて、指導時間においても連続性のある形で対応することが可能な制度にすべきとの意見や、知的障害のある児童生徒も教科によっては通常の学級で学ぶことができる弾力的な仕組みについて検討すべきとの意見がある」、「特別支援教室構想は理想的ではあるが、その制度化に当たっては、教職員配置の在り方を含め、総合的かつ慎重に検討すべきとの意見もある」とし、特別支援教室を障害種別にするか否か、児童生徒が籍を置かない教室に対する教員配置システムの在り方、教育課程の在り方、在籍学級と特別支援教室との指導・責任の分担、より軽度の障害のある児童生徒への対応の在り方等の検討課題を挙げている。

2012年には、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築の特別支援教育の推進」が報告され、特別支援教育からインクルーシブ教育システム

へ転換しようとしている。

しかしながら、現在、特別支援教室(仮称)に関する議論は進んでいない状況にある。インクルーシブ教育システムは、米国等で先進的に進められており、「リソースルーム」がその役割の一つを担っている。リソースルームは、我が国の教育現場にはみられない教育形態であるが、米国では特別支援教育サービスの一つの形態として普及している。米国は州によって教育制度が大きく異なり、リソースルームの設置状況やそこでの教育の実際も州や学校区によって多様である。

本稿では、我が国が今後、議論していくであろう「特別支援教室(仮称)」のモデルと考えられるリソースルームについてインディアナ州の事例を述べる。その際、紹介する実態が米国のリソースルームを一般化されるものではないことを前提として進める。

II. 米国におけるリソースルーム方式

米国では1990年代からインクルージョンの考え方が広がった。インクルージョンは、すべての子どもが障害の有無にかかわらず、本来、通学すべき学区の学校や学級で教育を受けることを理想としている。政策的にインクルージョンを進めているものの、その概念レベルの議論は依然、続いている。

インクルージョンの実践的レベルで大きな役割を果たしてきたのが、1960~70年代から設置され、進展してきたリソースルームである。米国の通常の学校は、障害の程度が比較的、重度・重複の子どもが通う特別支援学級と障害の程度が比較的、軽度の子どもが利用するリソースルームとを区分して、併置している。

リソースルームは、障害のある子どもが、通常の学級に在籍しながら、必要な時間、少人数による学習指導を受ける場所となっている。米国連邦政府が定める教育措置カテゴリーの「リソースルーム措置」は、学校で過ごす時間のうちの21%～60%の時間をリソースルームでサービスを受ける状況を指している。すなわち、1日のうち、少なくとも1時限分の授業時間をリソースルームで過ごすことになる。

しかし、実際には、障害が認められなくても通常の学級の子どもたちも一日の21%未満の時間をリソースルームで過ごし、さまざまな支援を受けている。

教育財政面からリソースルームを見ると教育費用が固定式の特別学級よりも効率的であり、校内で教師間の連携がしやすいとされている。子どもたちは障害の有無によらず、1日のうち、1時限分の授業時間をリソースルームで受け、通常の学級に在籍しながら自分の学校内で特別な支援が受けられる。

Ⅲ. 質問紙法によるソースルームの実態調査

米国インディアナ州デラウェア郡、ハミルトン郡の公立学校のリソースルーム担当教師（リソースルームがない場合は特別教育担当教師）を対象に調査を行った。リソースルーム担当教師には教師補助者（アシスタント、エイド）も含めた。この群の教育学区の管轄下にある30校の公立学校に質問紙をEメールで配布し、13校から回答を得た。回答率は43.3%であった。質問紙が、一つの学校から1つ以上返ってきた場合があったため、回答者（教室代表者）は20名であった。学校種別では、小学校が7校（53.8%）、中学校が2校（15.4%）、高校が3校（23.1%）、中高一貫校が1校（7.7%）であった。全校児童生徒数からみた学校規模別では、300～399人が3校（23.1%）、400～499人が2校（15.4%）、500～599人が5校（38.5%）、700～799人が2校（15.4%）、800人以上が1校（7.7%）であった。この800人以上の学校の在籍数は2800人であった。

内容は、リソースルーム方式の実施率、学校ごとのリソースルーム設置数、呼び名、利用している児童生徒数、担当の教師数、巡回指導・テスト時の支援について、児童生徒の利用時間、児童生徒の障害種、指導教科・内容、教材、指導人数・学年、リソースルームでの評価法、特色ある取り組み等を調査した。

主な結果は、次のとおりである。

- 1) 回答した学校は、すべてリソースルームが設置され、サービスが実施されている。
- 2) リソースルームの数は、全校児童数が550人でリソースルーム数が一つの小学校もあれば、全校児童数が532人でリソースルーム数が3つの小学校もあった。各学校のリソースルームの数はおおむね学校の全校児童生徒数に比例していた。全校生

徒数2800人の大規模校では、11のリソースルームが設置されていた。一つの学校に2つ以上のリソースルームが設置される傾向にあった。

- 3) 学校での呼び名は、8割以上が「リソースルーム」という言葉をそのまま使用していた。リソースルームを通常の学級と同じように、担任教師の名前（例「Miss Smith's room」）や教室番号で呼んでいる学校もあった。また、リソースルームという呼称とその他の呼称の両方を併用している学校もあった。
- 4) リソースルームのタイプとして13校中1校のみが障害別であり（主に一つの障害が対象となっている）、残りの12校が、複数障害を含む（2つ以上の障害種が同じリソースルーム内で対象となっている）、又は、障害種別を問わなかった（障害ラベルによる分類はない）。一つのリソースルームでさまざまな障害種の児童生徒を指導している学校が一般的であり、一つのリソースルームにつき一つの障害を対象としている学校は少ない。
- 5) リソースルームから何らかの支援（巡回指導、テスト時支援を含む）を受けている児童生徒数では、学校の規模（全校児童生徒数）による差は見られず、全体の1割強の児童生徒がリソースルームから何らかの支援を受けていた。少なくとも一日一回、リソースルームを利用している。ないしは、リソースルームから何らかの支援を受けている児童生徒は約3割～半数程度であった。
リソースルーム担当者数は、教師・教師補助合わせて、全校児童生徒数500人以下の学校では平均3人程度、全校児童生徒501～800人の学校では平均6人程度であった。全校児童生徒2800人の大規模校では、27人が配置されていた。
- 6) リソースルーム教師が通常の学級に出向いての指導（巡回指導）を行っているとした学校は全体の8割を超えた。通常の学級のニーズに応えることがリソースルーム教師の役割であることが示された。全ての学校がテストの際、配慮（時間延長・別室受験など）を行っていた。このことは、普段、リソースルームに通う生徒以外にも対象として配慮措置を実施していた。
- 7) 児童生徒がリソースルームで過ごす時間が一番長い場合は、1～7時間と学校によってばらつきがあった。最長の滞在時間が1～2時間、3～4時間、5～7時間と回答した学校もそれぞれ3割あった。リソースルームで過ごす時間が一番短い生徒の滞在時間は、1単位時間より少ない場合もあり、滞在時間が5～10分と回答した学校が2校あった。リソースルームでの指導時間は学校の裁量によるようである。5～10分の休憩時間に児童生徒がリソースルームを利用している学

校があり、授業時間にしばられずに柔軟に活用されている。

- 8) リソースルームを利用している児童生徒の障害種では学習障害は100%、ADHDは85%、自閉症は80%であった。感覚器の障害（聴覚障害・視覚障害）や言語障害のある児童生徒が利用していると回答した教室は全体の4分の1であった。学習障害やADHDを含むその他の健康障害、自閉症が、リソースルームにおいて一般的な障害種である。

リソースルームを利用している児童生徒の障害種が多様である一方、多くのところで特定の障害種が多くを占めている。リソースルームはさまざまな障害種の児童生徒を受け入れる柔軟なシステムとなっているが、実際には学習障害やADHDの児童生徒のニーズが高い。

- 9) Math, Reading, Writingなどの学習教科のうち、複数の教科を教えていると回答したところが全体の半数近くあった。約3割が「すべて」と回答した。社会的スキルや学習スキルを教えていると回答したところも複数あった。

リソースルームが学習教科全般もしくは子どもが支援を必要としている学習教科の指導を行い、教科の学習以外に、社会的スキルや学習スキル、話を聞くスキルといった生活や学習に必要なスキルの指導を行っているところもあり、学校や教師の方針によって指導内容に大きく幅がある。

リソースルームでは全体の7割のリソースルームにおいて、通常の学級の児童生徒と同じ教材を使用していた。リソースルームでの学習が、通常の学級での学習にそのままつながるような指導や支援が行われている。通常の学級の児童生徒と同じ教材を使い、リソースルームによる少人数指導によって学習を促進させている。また、「場合による」と回答したところも2割あったことから、同一教材でも少人数指導によって効果が見られる場合には通常の学級と同じ教材を、そうでない場合には個々のレベルに合わせた教材を使っているところもある。

- 10) リソースルームで一人の教師が一度に何人を指導するかに関しては、5人以下と回答したのは50%以上であった。最大でも10人としていた。85%が異なる学年の児童生徒を同時に指導している。リソースルームでは1人から5人以内程度の規模で少人数の指導を行う一方、異学年の児童生徒を同時に教えている。

IV. リソースルームに関するフィールドワークによる実態調査

(1) インディアナ州ハミルトン郡F中学校

F中学校は、インディアナ州都であるインディアナポリスから30キロほどのところに位置し、7年生と8年生が通う全校生徒約800人の公立中学校である。そのうち約10.6%にあたる85人が特別支援を受けている。

F中学校には、①FAP (Functional Academic Program)、②ED (情緒障害) プログラム、③一般的なリソースプログラム、という3つの特別支援プログラムがある。

FAPは固定式の特別学級で、自立のために必要な学習スキルの習得を目指しており、約15～20人の生徒がいる。障害種は知的障害、肢体不自由、自閉症などさまざま、障害の程度の比較的重い生徒がここで学習する。教師1人、アシスタント2人で担当している。また、常に医療的ケアが必要な生徒も数名いるため、看護師も2人付き添っていた。

ED (情緒障害) プログラムは15～20人の生徒が受けている。教師1人で担当している。

一般的なリソースプログラムの対象生徒は76人いる。教師3人とアシスタント5人で担当している。これが、いわゆるリソースルームである。

1) リソースルームの形態

F中学校は1階建てで、西側に体育館やカフェテリアがあり、東側は図書室を中心にして教室が広がっている。リソースルームはその図書室の比較的近くであり、一般教室群から特に離れているわけではない。

リソースルーム用に3つの教室を使っていた。そのうち一つの教室（以下、A教室）は、通常の教室の1.5倍ほどの広さがあり、正面にホワイトボード、両側面に黒板があった。教室の数か所で同時に指導をするための十分なスペースがある。A教室内には、課題のプリントが入っているフォルダーの棚や、電卓などの備品があった。一人用の机（机といすがくっついてあるタイプ）が20ほど並び、教室の横には生徒用のデスクトップパソコンが3台あった。A教室後方には、4人ほど座ることができるグループ指導用の机があった。A教室後方には扉があり、奥には通常の教室より少し小さめの部屋（以下、B教室）があった。一人用の机が並んでいた。A教室の廊下をはさんだ向かいには、もう一つリソースルーム（以下、C教室）があり、黒板と一人用の机が並んでいた。通常の教室より少し小さめであった。

これらのリソースルームを3人の教師と5人のアシスタント（うち、補助者が3人、1対1支援の補助者が2人）が担当している。リソースルームの利用対象生徒は76人で、そのうち、日常的にリソースルームを利用しているのは69人である。残りの7人はリソース

ルームからの具体的な支援は受けておらず、相談のみであった。

2) リソースルームの役割

リソースルームでは、広い教室内で前、後ろ、横などに生徒を数人ずつ分け、少人数での指導を提供している。各グループに1人の教師がつき、時には黒板やホワイトボードを使いながら指導が行われる。リソースルーム教師は、通常の学級に入り込んで、支援が必要な生徒の指導にあたることも多い。そのため、F中学校のリソースルームでは、常に何人かの教師は通常の学級に出向いていた。

リソースルームは、通常の学級でテストが行われる際の支援の場としても使われている。リソースルームでの別室受験や時間延長などである。普段リソースルームを利用していなくても、IEP（個別教育計画）でテスト時の支援が必要とされた生徒は、このような支援を受けることができる。

生徒のリソースルームの利用頻度はさまざまで、一日に何度もリソースルームを訪れる生徒もいれば、テスト時だけ利用する生徒もいる。それぞれのIEPによって決められている支援を受ける。

また、ELL（英語学習者）で、かつ発達障害のある生徒がリソースルームで支援を受けていた。

リソースルーム教師に「一番気を配っていることは何か」と質問すると「生徒が、自から支援を求めるようにすること」と「Step by step」という回答であった。必要な支援を自分から求めることをしない生徒もいる。生徒が今後自立していくためにも、他人からの支援のオファーを待つのではなく、生徒自身が、自分にはどんな支援が必要かを相手に伝えられるようにしたいという考えが教師にはある。また、学習指導にはStep by stepということも大切にしていた。

3) リソースルームでの学習の様子

① 20XX年X月5日

一つの教室内でグループに分かれ、常にいくつかの授業が同時進行していた。あるグループは国語、他のグループは数学を行っている。

【1時間目のリーディングのグループ】

6人の生徒を1人の教師が担当していた。生徒6人をさらに4人と2人に分け、それぞれに別の指示を出していた。生徒4人はグループ用の机に集まり、小学校5年生レベルの読み物プリント（ギリシャ神話）を順番に交代で音読した。生徒が音読につまったり、読み間違いをしたりすると、教師がゆっくり読んでそれを復唱させていた。音読後、生徒は、話の内容に関するプリントの問題に取り組んだ。教師はそれぞれの生徒の様子を見たり、助言をしたりしていた。最後に教師が、プリントの問題を中心に生徒に質問をしていき、全員で内容を確認した。2人の生徒は、授業の最初に、リソースルーム内のパソコンを使い、インターネット

から自分の気に入る記事を見つけ、その記事についてサマリー（要約）と意見を書くように教師から指示を受けていた。生徒らは、授業時間内はパソコンに向かい、授業終了時に、教師のところへ紙を提出しに来ていた。同時に別室では、1人の生徒が、教師からマンツーマンでリーディングの指導を受けていた。

【2時間目の数学のグループ】

生徒4人を教師1人が担当していた。1人の生徒はパソコンに向かい、残り3人の生徒は同じ課題プリント（通常の学級で出されたもの）を机に出し、教室前方のホワイトボードに向かって座った。プリントの内容は、単位の変換の計算であった。生徒は単位換算のやり方についてはすでに習った様子であったが、とても苦戦していた。生徒たちは問題のパターンを見て、どんな立式をすればよいのかをまず考えた。特に文章題では、生徒の手が止まっていると、教師は問題の要素（何を求めるのか、単位は何か、等）を生徒に一つ一つ尋ねて確認しながら、生徒が式を立てられるようにしていた。生徒たちはそれぞれのペースで問題に取り組み、ところどころで教師が生徒に式と解答の手順を順番に答えさせ、それを教師がホワイトボードに書いて生徒が再確認できるようにしていた。

【リソースルームアシスタントの巡回指導の様子】

リソースルームアシスタントが8年生のEnglishの通常の授業に出向く。支援の対象生徒が2人おり、アシスタントはそのうち一人の生徒の隣に座って、生徒とともに授業を聞いていた。適宜、テキストの開くページを指示したり、テキストの文章を指差して生徒に示したりしていた。また、アシスタントは、学級で出された課題や小テストの予定についてしっかりとメモを取り、授業終了時に生徒や授業担当教師と少し会話をしリソースルームに戻った。

② 20XX年X1月6日

【帰りのホームルーム】

この学級にはリソースルームで指導を受けている生徒が多くいた。帰りのホームルームでは、その日に通常の授業で出された課題や小テストのスケジュールなどを、教師がプレゼンテーションソフトに打ち込んでおき、教室のスクリーンに表示した。そして、「○○先生のクラスで金曜日にテストがあるから、今日から勉強をしましょう。今日はまず△△をやりましょう」というように、生徒に計画的な学習を促した。

また、宿題の内容をパソコンで打ち込み、それをEメールで自宅に送信している生徒もいた。宿題を確実にを行うための工夫である。

4) リソースルームでの評価法

リソースルームを利用する生徒は2週間に一度、1分間の音読テストを個別に受ける。1分間にいくつの語が読めたか、いくつ間違いをしたか、をデータにしてモニタリングする。モニタリングには、「AIMSweb」

という評価ソフトを利用している。特別支援を受けている生徒のデータはこのソフトで管理され、特別支援にかかわる教師・アシスタントらがアクセスすることができる。

テストは生徒が集中できるようB教室において1対1で行われる。生徒はシートに書かれた文章を読み上げた。アシスタントは時間を計りながら、生徒が詰まったり読み間違えたりした単語の数を教師用のシートに記録していた。

5) その他

リソースルームで指導をうけている生徒それぞれに対して、1年に一度カンファレンスがある。ACR (Annual Case Review) とよばれ、保護者、カウンセラー、言語聴覚士、通常の学級の教師、特別学級の教師、リソースルーム教師、進学する高校の教師などが集まり今後の支援についての話し合いをする。

F中学校の特別サービス (Special Service) の部門には、障害のある生徒のためのプログラムだけではなく、英語学習中の生徒 (母語が英語でない) のためのENL (English as a New Language) クラスもあり、ENL教師が1人いる。F中学校の英語学習者は約20人である。

(2) インディアナ州デラウェア郡S小学校

S小学校は、ボールステイト大学からほど近いところに位置し、年長児から5年生までの全校児童約300人が通う公立小学校である。全体の約27%にあたる81人が特別支援を受けている。これとは別に、特別支援対象児のみのPre-Schoolが小学校内にあり、40名が通っている。

S小学校にはリソースルームが1つあり、教師1人とアシスタント1人で担当している。他の特別支援のサービスとして、固定式の特別学級が4つ (自閉症児クラス、情緒障害児クラスが1つずつ、重度・最重度クラスが2つ) ある。Pre-Schoolは2クラスあり、特別支援対象の3～5歳児が通う。Pre-Schoolの子どもは午前に通うグループと午後に通うグループに分かれている。

1) リソースルームの形態

S小学校では、一つの教室を使っていた。教室は広々としており、教室中央に、机が長くつなげてあり、10人ほどが座れるようになっている。個別指導用の机が教室の両隅に1つずつと、パソコンが2台あった。壁面には掲示板のみで、大きな黒板やホワイトボードはなかった。代わりに、幅60センチ高さ1メートルほどの可動式ホワイトボードが2つあった。教室の窓側には、カーベットの敷かれたスペースがあった。そこは絵本に囲まれ、ロッキングチェアや大きなクッションもおかれ、児童がくつろぐことができるスペー

スになっていた。

リソースルームから支援を受けている児童は50人ほどで、そのうち毎日リソースルームを利用している児童は30人ほどである。教師1人、アシスタント1人で担当しており、1人が一度に6人の児童の指導にあたっている。

聴覚障害児には手話通訳者が1対1で付き添っていた。リソースルーム滞在時間は児童によって1時間から6時間とさまざまである。利用者は学習障害のある児童が多いが、自閉症、ADHD、情緒障害などの児童もいる。

2) リソースルームの役割

児童を小人数のグループもしくは1対1で支援しながら、必要な教科すべての指導が行われる。また、課題が終わった児童がリラックスして過ごせる場ともなっている。通常の学級でテストが行われるときは、リソースルーム利用児童は、リソースルームでテストを受けることができる。

リソースルーム内での支援だけでなく、リソースルーム教師が通常の学級に出向いて支援することもある。

3) リソースルームでの学習のようす

① 20YY年Y月1日

【1時間目】

3～4年生の児童7人がリソースルームに来て、算数のグループ指導を受けた。児童はプリントの課題に取り組み、終わったらリラックススペースで本を読んでいた。教師は、課題の終わった児童に小さなキャンディーを与えていた。聴覚障害のある1年生には、手話通訳者とともに、個別指導机で単語カードを並べて文を作るという活動に取り組んでいた。

【2時間目】

この時間にセラピードッグ (聴導犬) がリソースルームにやってきて、児童たちは大はしゃぎであった。セラピードッグの訓練を終えた、マルチーズと思われる小型犬であった。1週間に一度、飼い主がボランティアで学校を訪問している。教師の話では、聴覚障害のある1年生が、入学当初はあまり自己表現をせず、なかなか学校になじめずにいたが、セラピードッグが来るようになって、とても楽しそうに犬と遊ぶようになったという。そのうち人とのかかわりも増え、活発に手話を使って話すようになり、友達も増えてきたそうだ。リソースルームのパソコンの隣には、聴覚障害のある1年生が、段ボールで作った隠れ家があり、セラピードッグと一緒にこの中にもぐりこんでいた。

ある自閉症の5年生は、教師1人と、土を入れた鉢に植物の種を植えていた。教師はこの5年生に「芽を出させるためには何が必要か」と尋ね、児童は「水!」と答えていた。そしてこの児童は鉢に水を注いだ。その後、教師がさらに「他には?」と尋ね、児童は「太

陽の光!」と答え、教師とともに鉢を窓際のところに置きに行っていた。子どもたちはリラックススペースに集まり、本を読んだり、教師や飼い主と話をしたり、セラピードッグと遊んだりして、2時間目を過ごした。

4) リソースルームでの評価法

「Acuity」, 「STAR Math」, 「STAR Reading」といったWebベースの評価法を利用している。評価は月に一度行う。

5) IEP会議

IEP会議は子どもそれぞれに対し年に一度開かれ、Annual Case Reviewと呼ばれている。

ある自閉症の5年生児童のIEP会議の様子を紹介する。IEP会議の出席者は、両親（保護者）、リソースルーム担任、ST（言語聴覚士）、OT（作業療法士）、中学校の教師2人、特別支援教育コーディネーターなど計12人であった。それぞれの簡単な自己紹介に続き、まずはリソースルーム担任から、本児の普段の様子、学力面・生活面での変化などの報告がされた。そして両親は、本児の家庭での様子を伝えた。その後、本児が次の学期に中学へ進学することから、中学の教師に対して、今どのような支援を受けているかという情報の引き継ぎや、小学校から中学校へどのように支

援をつないでいくかが話し合われた。例えば、現在週に2回受けているST（言語療法）の指導を中学ではどうするかは、両親の意向も踏まえ、中学でも現在と同じ時間数の指導を受けることが決まった。両親とも、教師から学校での様子や支援の成果の報告を聞いて、「では、その支援を引き続き行ってほしい。」とか「〇〇の時間を増やすことはできないか。」というように、はっきりとした要望を伝えていた。本児ができるようになったことの報告や日常生活の話題では笑いが起こるなど、とても和やかな雰囲気での会議であった。朝8時から始まったこの会議は、約1時間半で終了した。会議の場所はリソースルームであった。



図1 F中学校のリソースルーム：A教室（前方）

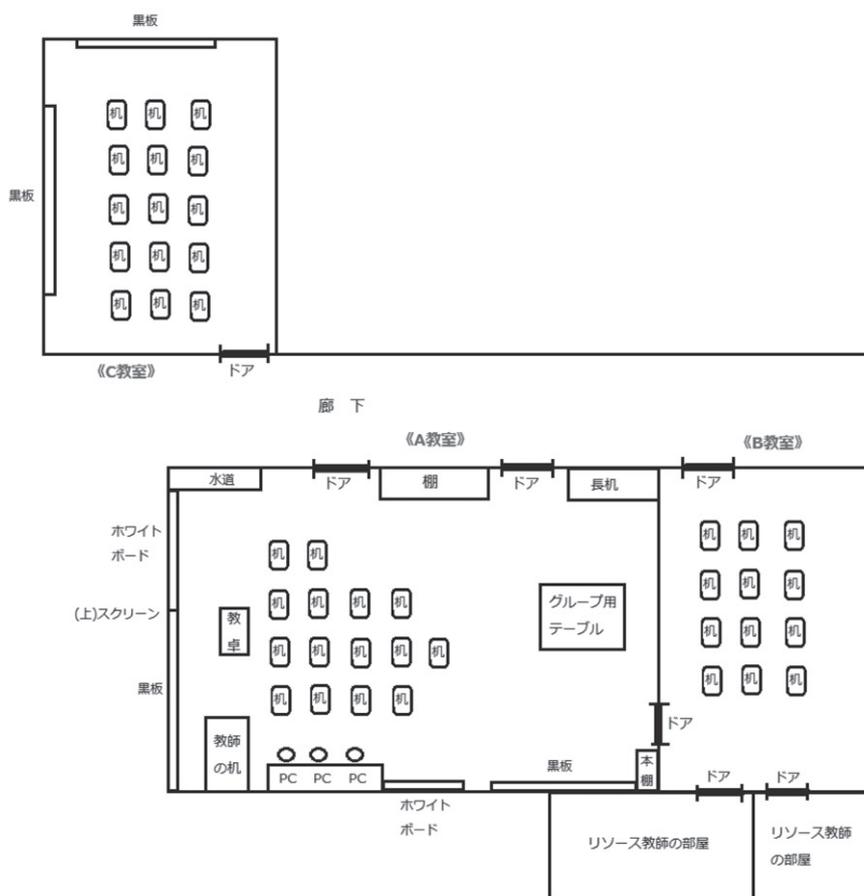


図2 F中学校のリソースルームの平面図



図3 F中学校のリソースルーム：A教室（後方）

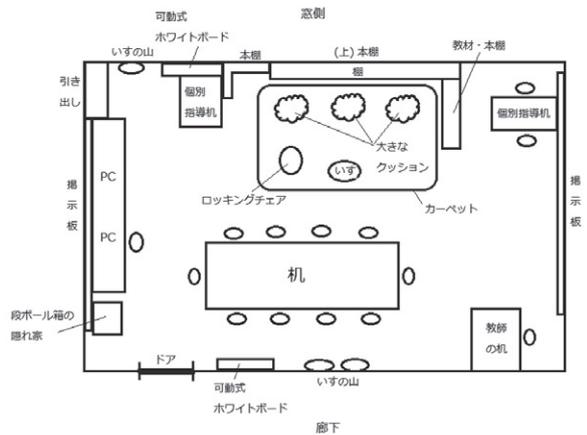


図4 S小学校のリソースルームの平面図



図5 S小学校のリソースルーム：手前（グループ机）



図6 S小学校のリソースルーム：くつろぎスペース

V. インディアナ州のリソースルームの考察

(1) 機能と位置づけ

リソースルームは、特別学級（我が国の特別支援学級）以外の支援リソースとして各学校に広く普及している。設置数は学校によって異なるが、概ね学校の規模に合わせた設置されている。さまざまな障害種の子どもにリソースルームで柔軟に対応して指導を行っている。

リソースルームでは、学習障害児が多く、次いで健康障害（ADHDを含む）、自閉症、情緒障害の子どもである。知的障害がある児童生徒は特別学級で学んでおり、リソースルームの対象ではない。

リソースルームで何らかの支援を受けている子どもの数は、平均すれば全体の1割強である。通常の学級に在籍している支援の必要な子どもを幅広くカバーしている。

リソースルーム教師の80%は、通常の学級に出向いて指導している。通常の学級で直接、子どもに支援を行うことに加え、リソースルーム教師が通常の学級の授業や課題の内容を把握できることやその情報をもとに子どもに学習計画等のアドバイスがしやすくなる。このことからリソースルーム教師の通常の学級に果たす役割は大きい。

校内のテスト時の配慮として普段からリソースルームに通っている子ども以外にも支援を提供している。ほんの少しの支援が必要な子どもから、多くの支援を必要とする子どもまで、幅広い層を対象にしている。リソースルームを利用する子どもの数やリソースルーム教師の人数が多いことにより校内でのリソースルームの存在感も高まり、周りの教師や子どもからも認識されやすくなっている。このことで子どものリソースルームへの抵抗感が少なくなっている。

リソースルームの運営は、学校や担当教師によって比較的自由に行われている。くつろぎスペースやセラピードッグ、パソコン、ホームルームの活用がみられたように、それぞれのリソースルーム教師が工夫をしながら、リソースルームの運営に取り組んでいる。このような自由な環境があるために学校や担当教師はさらなる工夫ができ、特色ある取り組みがしやすくなり、リソースルームの支援内容が更に充実していくことにつながっていく。

一方、学校ごと・リソースルームごとに支援体制や方法に大きな差が生まれる可能性が考えられる。リソースルームに一定の支援水準を確保するためには、今後、指導方法や評価を含め、学校群、地域単位、さらには州単位での基準や規則を作成する必要があるかもしれない。

リソースルームには排他的な印象は見受けられず、リソースルームを訪れる子どもの多くは、補習感覚で

リソースルームを利用しているように見受けられた。リソースルームの利用人数が多いことや子どもが入れ替わり訪れる活発な場所となっていることがリソースルームへの敷居を低くしている。

リソースルーム教師・アシスタントは、リソースルーム内や巡回指導での連携のみならず、支援のコーディネートをしたり、他の教師や保護者と密に連携をとったりすることもリソースルーム教師の大きな役割である。また、リソースルームを担当する教師やアシスタントは、取り出しという抽出指導だけでなく巡回指導を行うために多くの人数が必要になる。通常の学校にもかわらず、教師・支援者の人数面で手厚く体制が作られている。

リソースルーム担当者の中には正規教員ではないアシスタントも多いたが、アシスタントは一人で少人数グループの指導を受け持ったり、通常の学級への巡回指導を行ったりしており、外観からは正規教員と見分けがつかない。米国の各州は多くは、教員免許の更新制を採用しており、概ね6年の教育実績を積みか、または修士号を取得しないと正規教員の資格が与えられない(終身雇用の資格が取得できる)。アシスタントも教員免許状を所有し、教育的実践力は高く、いわゆる、我が国の「特別支援教育支援員」、あるいは「学習支援員」とは異なる。これに相当するのは「エイド」(補助員)と呼ばれるスタッフであり、リソースルームとは別の部署にいる。

インクルージョンの実践が進むにつれて、リソースルーム担当者が通常の学級に付き添うケースが多くなり、リソースルーム担当者の人数が多く必要となってきた。そのため、財政的な面からも正規教員ではないアシスタント(一般的には給料が指導時間に応じて支給される)の人数を増やさざるを得ない事情もある。

(2) リソースルームの指導

1) 抽出指導

リソースルームの最も一般的な役割として児童生徒の抽出指導が挙げられる。児童生徒は通常の学級から一定時間抜けて、リソースルームで少人数または個別の指導・支援を受ける。個々の子どもの学力・理解レベルやペースに合わせた学習や少人数での指導が通常の学級でできない場合にはリソースルームならではの役割として確立している。

S小学校のリソースルームでみられたように、児童がくつろげるスペースの提供やセラピードッグの活用等、学習に課題のある子どもたちが一日の多くを通常学級で過ごしながらか、リソースルームで必要な学習支援だけでなく、リラックスできる時間や教師との対話の時間を得られる。子どもたちは、自分と同じように学習に困難さを感じている仲間にも出会うことができる。このような子どもへの精神的サポートもリソ

スルームの一つの役割である。

2) 通常の学級への巡回指導

リソースルーム教師が通常の学級へ出向くことには三つの意義があると考えられる。一つ目は児童生徒に対して通常の学級でうまくやっていくための必要な支援を直接提供することである。二つ目は、通常の学級での授業・課題の内容やテストの予定をリソースルーム教師がよく把握できることである。リソースルームでの教え方が通常の学級での教え方と著しく異なっていると、子どもは混乱してしまう。通常の学級で子どもたちがどのように学習したかを知った上でリソースルームでの指導を行うことでより効果的な指導・支援ができる。また通常の学級での課題やテストの予定を把握し、タイミングよく子どもに再度伝えることで、子どもに計画的に学習するためのスキルを身につけさせたり、課題やテストに向けた十分な準備をさせたりできる。三つめは、巡回指導で教室を訪れることが、リソースルーム教師と通常の学級教師との頻繁な打ち合わせをする機会となることである。これは互いの教師がそれぞれ責任感をもって子どもの支援を行い、支援の足りない部分は協力して補い合うためにとても重要である。

3) テスト時の支援

リソースルームが、テストの際の別室受験や時間延長といった支援の場としても活用されている。F中学校のように、テスト時のみのリソースルーム利用者もおれば、多くの支援が必要な子どもから、ほんの少しの支援が必要な子どもまで、さまざまな子どもに対応している。テストの公平性を保たなければならないという問題もあるため、テストの際の配慮の認定は慎重に行われている。子どもたちの個々のニーズに配慮し、より力を出せるような環境を整えることにリソースルームが貢献している。

(3) リソースルームにおける子どもたちの学習

1) 学習内容

リソースルームで、在籍する学級の生徒と同じ内容の課題に取り組む者もいれば、学年を下げた内容の課題に取り組む者もいた。F中学校では、体育や音楽といった選択科目の時間を利用してリソースルームに来ている生徒が多くいた。生徒の数学の理解レベルが小学3年生程度だとしても、在籍する学級の数学の授業には出席しなくてはならない。在籍学級のレベルの数学の授業にはついていけないが、座っていないことはない。他の生徒が体育や音楽をやっている時間に、追加の数学の授業(自分のレベルに合ったもの)をリソースルームで受けることになる。子どもたちは、進級するためにやむを得ないことを承知している。

米国では、高校卒業にあたって、Diploma(高校の

学位)とCertificate of Completion(特別支援の卒業認定)の二種類がある。ある高校を観察したところ、学位を取らないコースの子どもたちは能力に合わせた基礎的な事項の学習をし、学位の取得を目指す子どもは、通常の学級の課題に取り組んでいた。このような仕組みによって、生徒や教師の目標が明確になっている。

2) パソコンの活用

リソースルームにはパソコンが置いてあり、子どもたちが授業中にパソコンを使って課題に取り組んでいる。課題が終わった後に、自由に遊んだり調べ物をしたりするためだけではなく、授業時や理解度の確認に積極的に活用されている。

リソースルームの教師は、能力に差がある子どもたちを一度に指導しなければならないことも多く、子どもたちが自主的に学習できるよう、パソコンでの課題を出す場面も多くある。

3) ホームルーム

F中学校のリソースルームでは帰りのホームルームに、リソースルーム教師が巡回指導や通常の学級教師との打ち合わせで得た課題やテストなどの情報を、プレゼンテーションソフトに打ち出して、スクリーンに映し出す、という手法を取っていた。生徒は一見して課題の内容や締め切り等の情報を整理することができる。そして、その課題やテストのために、いつから何を始めればいいのかという教師の助言は生徒の助けとなる。このような教師の少しの工夫により、生徒たちの学習や学習に対するモチベーションが促進されている。

(4) リソースルームでの評価法

F中学校、S小学校ともに、ウェブベースの評価システムが用いられていた。これらは、民間の会社が出しているソフトウェアであり、紙ベースの評価テストを実施し、その結果を教師がパソコンに入力するタイプもあれば、子どもがパソコン上に表示されるテストに直接取り組むタイプ(コンピュータが自動で子どものレベルを判断して出題する)もある。これらの評価システムを用いることにより客観的に子どもの評価ができ、子どもの学力の推移を長期的にモニタリングできる。これらのデータを根拠として、指導・支援の目的や方法をより明確にできる。また、2週間に一度、1か月に一度、という短い間隔で評価を実施することにより、子どもの変化をより細かくとらえることができ、指導や支援の手立ての実施・見直しが効果的に行っている。

(5) 英語を母国語としない児童生徒(ELL: English Language Learners)への支援

ある高校ではエイド(教師補助員)がリソースルー

ムに入り、障害のないELLの児童のそばについて支援をしたり、F中学校では、発達障害も疑われるELLをリソースルームで少人数で指導したりしていた。

通常の学級に在籍する障害のある子どもの支援者が、ELLの支援者も兼ねている場合やF中学校のようにELL担当の教師がいる学校もあるが、そうでない場合には、リソースルームの人材がELL支援にうまく活用されている。

(6) リソースルームに関連する支援

学校にST(言語聴覚士)が常駐していたり、OTやPTがよく学校に出入りしている。リソースルームを運営していく上で大きな利点である。それは、子どもに対して年に一度開かれるIEP会議で同席するメンバーが同じ学校内で活動する機会が多いことにより情報交換や相談をより密に行うことができるからである。

V. おわりに

米国のリソースルームは、我が国の教育現場にはみられない特別支援サービスであり、その運営の実態はあまり明らかされてこなかった。我が国では、中央教育審議会の答申(2005)が、特別支援教育の対象をLDやADHDなどにも広げることや、通常の教育の場での支援が喫緊の課題であることを示してから10余年が経過した。今後、我が国においてもリソースルームのような学習支援の場が通常の学校に広く整備されれば、特別支援教育がさらに充実すると思われる。

米国のリソースルームは、通常の学級に在籍している障害のある児童生徒を対象にしている点や、通常の学級から児童生徒を抽出し、一定時間内で特別の指導を行い、指導が終われば通常の学級で学習や生活をさせるという点で我が国の通級による指導と似ている。

我が国の通級形態は、他校通級が54%と過半数を占め、自校通級は42%、巡回指導は4%である。米国ではすべての学校に設置されており、支援を受けるために他校へ通うということは一般には見られない。我が国の通級の指導時間は小学校で週1時間の児童は約50%、週2時間の児童は約33%であり、週1~2単位時間の通級指導を受けている児童が全体の8割以上を占める。中学校では週1時間の生徒は約31%、週2時間の生徒は約27%であり、週1~2単位時間の通級指導を受けている生徒が全体の6割弱を占める。米国のリソースルームでは、リソースルームから何らかの支援を受けている児童生徒の約3割~半数程度の児童生徒が、毎日リソースルームを利用しており、一日に複数時間をリソースルームで過ごすことも一般的である。

中央教育審議会(2005)は、「特別支援教室(仮称)」

を提言している。地域の実情, 個々の児童生徒の障害の状態に応じるとしながらも, 特別支援教室の具体例として次のように示した。

(ア) 特別支援教室1……ほとんどの時間を特別支援教室で特別の指導を受ける形態。

(イ) 特別支援教室2……比較的多くの時間を通常の学級で指導を受けつつ, 障害の状態に応じ, 相当程度の時間を特別支援教室で特別の指導を受ける形態。

(ウ) 特別支援教室3……一部の時間のみ特別支援教室で特別の指導を受ける形態。

今回の米国の現状の一端を見て考えられることは特別支援教室(仮称)を一部の学校のみに設置するのではなくすべての学校, 特に小学校に設置し, 子どもが自分の学校内で支援が受けられることが重要である, という点である。通級指導教室は, 拠点校や巡回校という設置形態があるが, 特別支援教室(仮称)は, すべて自校設置が制度的に成功する要件であると言える。特別支援教室(仮称)の制度を構想する際には, 自校設置が必須条件であると言える。

【付記】

本稿は, 林が米国ボールドステイト大学に交換留学生として派遣された間に, 都築の指導のもとに資料を収集し, 林が帰国後に林と都築が共同でまとめなおしたものである。

文献

- 1) 林真知子, 都築繁幸 2014 インクルージョンとリソース・ルーム方式に対する米国のリソースルーム教師の意識 教科開発論集 2, 229-245.
- 2) 都築繁幸, 林真知子 2013 米国の障害者教育政策に関する一考察(2) - インクルーシブ教育システムを巡る問題を中心に - 障害者教育・福祉学研究 9, 53-64.